Ⅰ．2015年度3回生「専門演習」を選択するにあたって

～研究の場としての専門演習～

私はゼミの学生に対し「研究」と「勉強」は質的に異なるカテゴリー（概念）であると、しばしば語ります。もちろん両者には思考するといった点で共通項もあります。しかし、前者すなわち研究においては解決すべき課題がなくてはならず、この点において両者は位相を異にしていると私は考えています。そしてゼミ（専門演習・卒業研究）は、大学の学びの中で研究という点において最も強く要請されている科目といえるでしょう。ここで研究には解決すべき課題があると書きましたが、この短い文章にはなにほどかの意味が込められています。

第１に、繰り返しになりますが、研究として成立するためには解決すべき課題がなくてはならないことです。産業社会学部の場合、社会に存在している課題の析出と解決が求められるのであり、それは５つの専攻すべてに該当します。物質や自然の中から課題や法則などを把握する自然科学者と同様に、私たちは社会に内在する、あるいはそこから派生する価値ある課題を見出さなければなりません。しかし、不断に移ろいゆく今に翻弄されがちな状況下にあって、つかみどころの難しい社会という対象から課題を析出することは容易ではありません。たとえば、余暇という課題が漠然と存在しているのではなく、余暇という研究対象の中にどのような課題があるのか、別言すれば余暇を通じて社会に内在する課題が具体化されなくてはなりません。

第２に、課題はよりよく解決されなくてはならないことです。社会に内在する課題を見出した以上、それを単に認知あるいは解釈するだけでは不十分であり、よりよく解決していくことが求められます。たとえば、高齢者の余暇に関する課題を設定した場合、時間的余裕の観点から余暇活動の概括的な可能性だけを解釈しようとするあまり、社会の中で実際に高齢者が抱えている諸問題への視座を欠落させてしまうと、高齢者の余暇としての課題はよりよく解決されないでしょう。

この点と関連して第３に、よりよく解決するという以上、設定された課題に関して全面的あるいは部分的に関係している先人の研究、いわゆる先行研究が批判的に検討されなくてはなりません。先人の研究から「学び」そしてそれを「問う」ことによってこそ学問（＝研究）は成り立つのです。渾身の力を込めて社会化された先人の研究を凌駕することは簡単なことではありません。また、自己の知見を裏づける論拠、あるいはそれを実証していくための学問的な資料や調査も必要となるでしょう。ゼミではこうした事柄を研究方法（論）として習得していくことになります。

このように、ゼミでの研究は気の遠くなるような思想的営為をともないますが、皆さんは現代社会の諸課題を総合的な観点から協同的な営みを通じて解決することを要請されている産業社会学部の学生なのですから、こうした課題にたじろぐわけにはいきません。しかし、ゼミで鍛え上げられた力量は必ずや己の将来を切り開いていくための源泉となります。そして、ゼミは生涯の友を得る場ともなるのであり、ゼミの中で協力協同、切磋琢磨して育まれた友情は、間違いなく生涯の財産となるのです。皆さんがゼミに所属し、いまだよりよく解決されていない課題に真摯に取り組んでいくことを心から期待しています。

2014 年 9 月
産業社会学部長　有賀 郁敏

1. ゼミとは何か

2回生の皆さん、産業社会学部での学びの中心となるゼミを選択する時が、いよいよやって来ました。学部のゼミという場合、3回生対象の「専門演習」と4回生対象の「卒業研究」の両方を指しますが、みなさんが選択するのは「専門演習」です。

ゼミでは、比較的少人数を対象として、文献講読や討論、あるいは様々な課題の遂行などがなされます。学問の方法論を身につける重要な機会です。特定の教員が主催するゼミに所属することで、専門を深く学び、卒業研究につなげていくことが期待されます。ゼミでの様子は、指導教員ごとに異なります。学問のスタイルを、特定の先生の直接的な指導を通じて学ぶ機会なのです。しかしまた、ゼミの様子は集まった学生集団にも左右されます。その意味では、ゼミはみなさんが作り上げていくものでもあるのです。

2. ゼミをどう選ぶか

産業社会学部での専門的な学びの中心となる「専門演習」の選択は、大学生活の後半2年間をどう設計するかということと不可分です。これまでの自分の学びの到達を踏まえながら、学生生活後半の2年間でどのようなテーマを追究するのかについて、しっかりと熟考してみてください。思いつきや思い込みで、あるいは一時的な興味関心をもとに「専門演習」を選択するのは、決して望ましいことではありません。「専門演習」は、大学生活後半の学びの軸となるものなので、その点を踏まえてゼミ選択に臨んでください。

ゼミを選ぶ上で、具体的にはどんなことに注意したらよいのでしょうか。まず、ガイダンスへの出席です。ゼミ担当の教員が、ゼミで行うことや来てくれる学生への期待などについて話をしてくれる大事な機会です。それゆえ、ゼミを選ぶ上で**クラス別ガイダンス出席は“マスト（必須）”**です、どんなことがあっても出席してください。また、担当教員の研究テーマや関心事を調べ、自分の興味関心と合致するかどうかの検討を行うことも大切です。大学のホームページには、教員紹介の欄がありますし、インターネットで教員の名前を入れて検索すれば、教員の関わる研究や社会的活動なども調べることができます。さらに、オフィスアワーなどを利用して、教員と直接話をする機会を持つことも大切です。特に、ゼミの選択に迷ったときには、教員に直接相談に行くことをお勧めします。

3. 産社の学びとゼミの位置づけ

「専門演習」は、産業社会学部における新しい学修スタイル―**“深めつつ拡げる”**―の機軸となる科目です。産業社会学部の人材育成の目的は、「産業社会学部は、社会諸科学に関する教育研究を通じて、新たな学問の地平を切り開き、学際性と専門性を兼ね備え、積極的に社会に働きかけて社会問題を解決していくことができる人間を育成することを目的とする」です。現代社会は、ますます複雑化・高度化・国際化の度を高めつつあります。そうした社会で思う存分活躍するために、関連諸分野への目配りの利く新しい専門性を獲得し、多面的に社会的現実にアプローチすることのできる資質―「**社会形成力**」―を獲得して欲しいと思います。このための新しい学修のスタイルが、**“深めつつ拡げる”**です。特定の分野や主題だけを単に“深める”だけでは視野の狭さに陥るおそれがあり、焦点を欠いたまま“拡げる”だけでは浅薄な博識に落ち込んでしまうかもしれません。それらを回避し、自らの学びを自主的に組織し、**＜学際的専門性＞**を獲得していきましょう。

「専門演習」は、産業社会学部の新しい学びの中で、おもに**“深める”**という側面を担うものとしてとても重要な位置を占めています。産業社会学部の多様な教学プログラムを活かし、皆さんの学びを体系化していくために、「専門演習」でしっかりと専門的な学びを深めることが肝要です。「専門演習」を中軸として関連諸分野についても学び、その関連諸分野での学びが「専門演習」での学びをさらに深めるというように、好循環を生み出してください。そのためには、「専門演習」での学びをしっかりと深めて学びの核を作ることがもっとも重要です。

ゼミは専門的な学びの中心に位置づくものです。ゼミでの学びは卒業研究にもそのままつながっていきます。土台を深め広げることで、みなさんが卒業研究という高い峰に挑戦していってくれることを期待します。